

第1回神戸マラソンのボランティア活動に関する研究

－動機、期待、満足度に着目して－

松村浩貴、土肥隆
伊藤克広、福田一儀
船越達也、福本直子
勝木洋子、小野昌二

はじめに

近年、東京マラソンに代表される市民ランナーも参加可能な数万人規模の市民マラソンの大会数が増加している。東京マラソンでは、日本陸上競技連盟との基本合意の中で「東京マラソンの開催を通してマラソンの競技力向上や普及振興を図るとともに、世界に向けて観光都市東京をアピールし、国内外から旅行者を誘致するなど大きな経済波及効果の実現を目指す」としている（東京マラソン大会公式ホームページa,2012）。コースも都内観光名所を巡り、東京の魅力をアピールするようなコース設定にしている。2007年に開催された東京マラソンの成功以降、国内各所でさまざまな市民マラソンが開催されており、その特徴は市民の健康やランニング愛好者の目標としてだけでなく、観光事業の一貫として、域外からの参加者の誘致を意識して開催されるようになってきている（木村，2009）。関西エリアにおいても、2010年に奈良マラソン（ランナー募集人数15,000人）、2011年に大阪マラソン（ランナー30,000人）、神戸マラソン（ランナー20,000人）、2012年に京都マラソン（ランナー15,000人）が開催されるようになった。笹川スポーツ財団の調査（笹川スポーツ財団公式ホームページ，2012）によると、成人のジョギング・ランニングの週1回以上の実施率は、2006年の2.9%から2012年は5.5%に上昇しており、ジョギング・ランニングの人気の高まりをみせている。市民マラソンの増加とジョギング・ランニング愛好者数の増加との因果関係は不明だが、東京マラソン2013の応募総数は303,450人（フルマラソン）で抽選倍率は10.3倍（東京マラソン大会公式ホームページb,2012）、神戸マラソン2012の応募総数は75,173人（フルマラソン）で抽選倍率は4.2倍（神戸マラソン大会公式ホームページa,2012）と定員を大きく上回っており、非常に多くの人々がマラソンへの参加を希望している状況である。

このような数万人規模のランナーが参加するマラソン大会の運営において、欠くことのできないものがボランティアの存在である。東京マラソンでは10,000人（東京マラソン大

会公式ホームページc,2012)、神戸マラソンでは7,500人(神戸マラソン公式ホームページb,2012)のボランティア参加者が、さまざまな活動を行いながらマラソン大会を支えている。山口(2004)は、スポーツ・ボランティアの種類と役割を大きく3つに分類している。1つめは日常的で定期的な活動である「クラブ・団体ボランティア」、2つめは非日常的で不定期な活動である「イベント・ボランティア」、3つめはプロスポーツ選手やトップアスリートによる活動である「アスリート・ボランティア」である。マラソン大会のボランティア活動は、2つめの「イベント・ボランティア」に分類される。さらに「イベント・ボランティア」の中でも、審判、通訳、医療救護など専門性を要する「専門ボランティア」と給水・給食、案内・受付、交通整理など特別な技術や知識が不要で、だれにでも容易に関わることができる「一般ボランティア」に大別される。本研究のボランティア活動は、「イベント・ボランティアの一般ボランティア」に該当し、特別な技術や知識が不要なため、だれにでも容易に関わることができることから、動機や目的も多種多様である。また、今年活動したボランティア参加者が、来年も参加したいと思う再参加意図をもつかどうかボランティア・マネジメントにおいて極めて重要になってくる。したがって、本研究では「第1回神戸マラソン(以下:神戸マラソン2011)」のボランティア参加者にアンケート調査を実施することによって、参加者の動機を明らかにするとともに、どのようなことに期待し、参加後どのようなことに満足しているのかを明らかにしたうえで、今後のマラソン大会におけるボランティア・マネジメントの基礎資料としたい。

研究方法

1. 調査方法

本研究では、2011年11月20日に開催された「神戸マラソン2011」で活動した登録ボランティア参加者(参加者総数は6,094名)を対象に、アンケート調査を行った。個人ボランティア登録者には、事前説明会にてアンケート調査票を配布し、ボランティア活動終了後にファックスにて返送してもらった。団体ボランティア登録者には、ボランティア活動終了後にアンケート調査票を配布し、郵送にて返送してもらった。個人ボランティアには1,200票配布し、回収数は285票であった(回収率23.8%)。団体ボランティアには1,131票配布し、回収数は633票であった(回収率56.0%)。個人ボランティアと団体ボランティアの合計は918票(うち有効回答数は889票)で、全体の回収率は27.2%であった。

本調査の研究組織は、兵庫体育・スポーツ科学学会「ひょうご地域スポーツ振興プロジェクト」の活動の一環で、プロジェクトメンバーが中心となって構成された「神戸マラソンボランティア調査グループ」である。「神戸マラソンボランティア調査グループ」はア

表1 調査内容

変数	項目	尺度	
属性	性別、年齢、職業、居住地、過去のボランティア経験		
動機	社交 人との出会い・交流 ----- 学習・経験 新しい知識や能力 日常では得られない経験 ----- 個人的興味 イベントに関与 ----- キャリア 仕事に役立つ ----- 自己陶冶 自己成長 ----- 組織的義務 職場や学校の活動の一環 ----- 社会的義務 人や社会に役立つ 神戸のために ----- スポーツ スポーツが好き ----- 第1回神戸マラソンに興味 ランナー抽選にもれた	12項目中3つ選択	
	期待・満足 社交 ランナーと交流 いろいろな人と出会い 知人と一緒に参加 職場や学校の仲間と参加 他のボランティアと交流 ----- 学習・経験 自分の知識や経験を活かす 新しい知識や経験を得る 社会的な視野を広げる 普段では得られない体験 ----- 自己陶冶 自分自身の成長 ----- 社会的義務 ランナーの支え 地域社会に貢献 ----- 達成 大会の盛り上げ 自分の能力を発揮 余暇時間を有効に過ごす 大会に自分が必要	1. 当てはまらない 2. あまり当てはまらない 3. まあ当てはまる 4. 非常に当てはまる	
	再参加意図	来年の神戸マラソンボランティア活動への参加意図	1. 参加したい 2. まあ参加したい 3. あまり参加したくない 4. 参加したくない

アンケート調査票の作成および分析を行った。また、調査協力団体として、神戸マラソン実行委員会がアンケート調査票の印刷、配布・回収、データ入力を担当した。

2. 調査内容

本研究の調査内容を表1にまとめた。調査対象となったサンプルの特性として、性別、

年齢、職業、居住地、過去のボランティア経験を質問した。応募動機は、松岡ら（2002）が述べているスポーツ・ボランティアの動機を構成する8要素を中心に挙げた。その8要素とは、「社交」「学習・経験」「個人的興味」「キャリア」「自己陶冶」「組織的義務」「社会的義務」「スポーツ」である。その他に、単項目を2項目加え、計12項目を動機として質問した。

ボランティアをする前の期待は、「社交」「学習・経験」「自己陶冶」「社会的義務」「達成」の5要素を採用し、計16項目を期待として質問した。ボランティアを終えた満足度は、ボランティアをする前の期待と対応するように作成した。

また、再参加意図として「来年も神戸マラソンのボランティアに参加したいですか」を質問した。

3. 分析方法

全体の傾向をみるために、各項目の単純集計を行った。そして、性別、年齢、再参加意図を独立変数とし、満足度に関する各項目を従属変数として分析を行った。有意性についてはt検定およびF検定を行い、有意水準5%で統計学的有意と判断した。なお、データの分析には、SPSS社の統計解析用ソフト「SPSS14.0 for Windows」を用いた。

結果と考察

1. サンプルの特性

調査対象となったサンプルの特性を表2に示した。性別は、「男性」が50.2%、「女性」が49.8%で、男女比はほぼ同じ値であった。

年齢は、「20歳未満」が最も多く42.1%、次いで「20-29歳」が18.8%、「60-69歳」が11.9%であった。「70歳以上」の参加者は6.3%であったことから、60歳以上の参加者は18.2%を占めていた。

職業は、「学生」が58.6%で一番多く、学生のなかでも高校生が56.8%、大学生が43.2%であった。次いで「会社員」が14.6%、「無職」が8.8%であった。「無職」が3番目に多く、年齢も60歳以上が18.2%もいたことから、退職した人が多数ボランティア活動に参加したことが伺えた。

居住地は、「神戸市」が65.3%、「神戸市以外の兵庫県」が26.8%、「兵庫県外」が7.9%で、6割以上が神戸市在住で、9割以上が兵庫県在住であった。

過去のボランティア経験は、「ある」と答えた人が57.0%、「今回初めて」と答えた人が43.0%で、過去にボランティア経験のある人がやや多かった。「ある」と答えた人の中で、

表2 サンプルの特性

		n=889
性別		
	男性	50.2%
	女性	49.8%
年齢		
	20歳未満	42.1%
	20-29歳	18.8%
	30-39歳	3.8%
	40-49歳	7.9%
	50-59歳	9.1%
	60-69歳	11.9%
	70歳以上	6.3%
職業		
	学生	58.6%
	会社員	14.6%
	公務員	4.7%
	主婦	4.7%
	アルバイト・パート	4.4%
	自営業	2.0%
	無職	8.8%
	その他	2.1%
居住地		
	神戸市	65.3%
	神戸市以外の兵庫県	26.8%
	兵庫県外	7.9%
過去のボランティア経験		
	有り	57.0%
	無し	43.0%

「スポーツに関するボランティア」に参加した人は27.8%、「スポーツ以外のボランティア」に参加した人は72.2%で、過去にスポーツ以外のボランティア活動に参加した人がかなり多いことが伺えた。

2. 動機

動機は12項目を設け、その中から3項目を選択してもらった。回答者が選択した各項目のパーセンテージを図1に示した。その結果、「日常では得られない経験ができる」が最も多く43.9%、次いで「第1回神戸マラソンに興味・関心がある」が40.5%、「職場、学校や団体の活動の一環として」が37.8%の項目で高い値がみられた。逆に、「現在や将来の

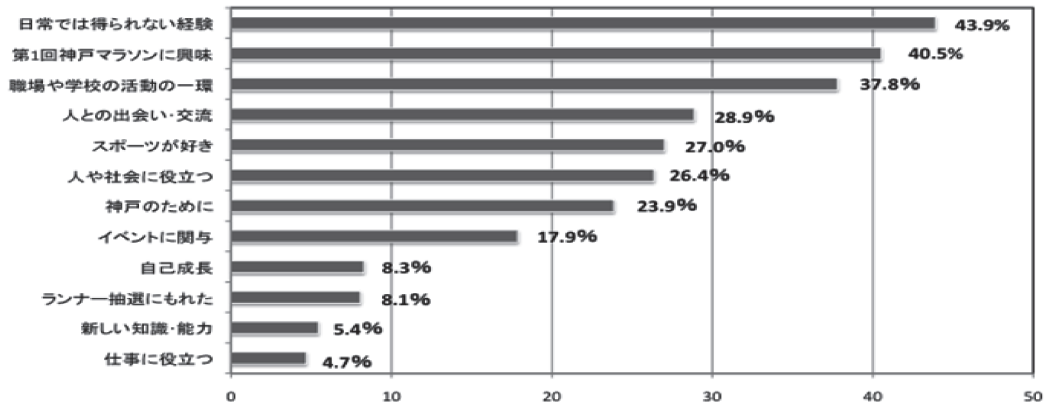


図1 応募動機 (n=2,503)

「仕事に役立つ」が4.7%、「新しい知識や能力を得ることができる」が5.4%、「ランナーとして参加したかったが抽選にもれた」が8.1%、「自己の再発見や自己成長につながる」が8.3%と低い値であった。

要因別にみると、「日常では得られない経験 (=学習・経験)」「職場、学校や団体の活動の一環 (=組織的義務)」の要因が高く、「仕事に役立つ (=キャリア)」「新しい知識や能力を得る (=学習・経験)」「自己の再発見や自己成長につながる (=自己陶冶)」の要因が低かった。坂野ら (2004) の研究では、地域住民におけるボランティア活動の動機のなかでも、「ものごとについての新たな考え方が得られる」「直接的な体験を通して、さまざまなことが学べる」という「知識の習得」に関する項目が高い値を示している。また、Kimら (2010) の研究では、ユース・スポーツにおけるボランティア動機の研究で、Understanding (知識の習得) の要素は、Values (利他主義) に次いで高い要素になっている。本研究において、「新しい知識や能力を得る」の「知識の習得」に関する要因、あるいは「自己の再発見や自己成長」の「自己陶冶」に関する要因が低かったのは、回答者の6割弱が学生であったことが考えられる。学生が団体ボランティアとして学校単位で参加する場合、個人ボランティアとは違った動機になる可能性も大きい。純粋にボランティアに参加したい学生と半ば強制的に参加している学生が混在していることが考えられる。このことは、本研究における動機項目の「職場、学校や団体の活動の一環 (=組織的義務)」が37.8%と3番目に高い値を示したことからも推察される。笹川スポーツ財団の調査 (2004) によると、スポーツ・ボランティア活動のきっかけは、「団体・連盟からの依頼」が33.5%、「友人・知人からの依頼」が25.3%、「町内会・職場からの依頼」が24.7%で、他者・団体からの依頼の合計は83.5%であるのに対し、「自主的な実施」は12.0%であった。また、伊藤 (2011) はボランティア活動の動機の研究で、イベント・ボランティアは「他

表3 期待と満足の平均値と標準偏差

	期待		満足		
	Mean	SD	Mean	SD	
普段では得られない体験	3.44	0.68	3.50	0.65	**
大会の盛り上げ	3.39	0.68	3.24	0.71	***
ランナーの支え	3.38	0.70	3.09	0.74	***
新しい知識や経験を得る	3.22	0.75	3.22	0.77	
社会的な視野を広げる	3.18	0.74	3.12	0.77	
地域社会に貢献	3.18	0.73	3.17	0.73	
いろいろな人との出会い	3.10	0.76	3.18	0.80	**
自分自身の成長	3.00	0.83	3.01	0.84	
ランナーと交流	2.92	0.82	3.05	0.94	***
職場や学校の仲間と参加	2.81	1.05	2.90	1.17	***
他のボランティアと交流	2.79	0.86	2.81	0.90	
自分の知識や経験を活かす	2.75	0.84	2.71	0.83	
余暇を有効に過ごす	2.74	0.94	3.08	0.86	***
知人と一緒に参加	2.70	0.99	2.95	1.10	***
自分の能力を発揮	2.67	0.82	2.85	0.81	***
大会に自分が必要	2.40	0.90	2.71	0.85	***

：p<0.01, *：p<0.001

律参加」のような理由も他のボランティアより生じやすいとしている。さらに、本来ボランティアは「自発性」をその特徴としているが、ビッグイベントの場合には、会社ぐるみ、学校ぐるみ、地域ぐるみでボランティア活動に参加することがあるため、義務感による受動的、他律的な活動への参加が、スポーツイベントのボランティアの特徴であるとしている。受動的、他律的な活動への参加が、スポーツイベントボランティアの特徴ではあるが、本調査では6割弱が学生を占めていることから、ボランティア活動の動機という点において、偏ったデータであることは否めない。データの信頼性を高めるために、個人ボランティア、団体ボランティア（高校・大学・一般）、オフィシャルスポンサー枠のボランティアなどの応募形態を均等の割合で配布・回収することが、今後のボランティア調査の課題だと思われる。

3. 期待と満足

期待と満足の平均値と標準偏差を表3に示した。ボランティア参加前の期待、参加後の満足ともにそれぞれの項目について「1. 当てはまらない 2. あまり当てはまらない 3. まあ当てはまる 4. 非常に当てはまる」の4つの中から回答してもらった。

期待の項目の中で、平均値が最も高かったのは「普段では得られないことを体験したい」

が3.44、次いで「大会を盛り上げたい」が3.39、「ランナーの支えになりたい」が3.38で高い値を示した。逆に、最も低い値を示したのは「大会に自分が必要であると感じている」で2.40、次いで「自分の能力を発揮したい」が2.67、「身内や友人・知人と一緒に参加したい」が2.70であった。

満足の項目の中で、平均値が最も高かったのは「普段では得られないことを体験できた」が3.50、次いで「大会を盛り上げることができた」が3.24、「新しい知識や経験を得た」が3.22で高い値を示した。逆に、最も低い値を示したのは「自分の知識や経験を活かせた」「大会に自分が必要であると感じた」が同じ値で2.71、次いで「他のボランティアと交流する機会を得た」が2.81であった。

「普段では得られない体験」が、期待、満足ともに最も高い値を示した。動機でも「日常では得られない経験ができる」が、最も高い値を示したことから、「非日常の経験ができる」はボランティア・マネジメントにおいて重要なキーワードになり得るとと思われる。ボランティア募集時のチラシあるいはホームページのキャッチコピーにも、「非日常の経験」をキーワードに利用すれば、「気付き」の段階において、多くの人に興味・関心をもってもらえるのではないかとと思われる。

全16項目中、期待よりも満足の値が高かったのは10項目で、期待よりも満足が低かったのは5項目であった（1項目は同値）。期待よりも満足の値が高かった10項目中、8項目で有意差がみられた。有意差がみられた8項目は「普段では得られない体験 ($p < 0.01$)」「いろいろな人との出会い ($p < 0.01$)」「ランナーと交流 ($p < 0.001$)」「職場や学校の仲間と参加 ($p < 0.001$)」「余暇を有効に過ごす ($p < 0.001$)」「身内や友人・知人と一緒に参加 ($p < 0.001$)」「自分の能力を発揮 ($p < 0.001$)」「大会に自分が必要 ($p < 0.001$)」であった。逆に、期待よりも満足の値が低かった5項目中、2項目で有意差がみられた。有意差がみられた2項目は「大会の盛り上げ ($p < 0.001$)」「ランナーの支え ($p < 0.001$)」であった。

有意差がみられた項目の中で、8項目は期待より満足の値が高く、2項目は期待より満足の値が低かったことから、参加者は概ね期待通り、あるいは期待を上回る満足を得ていたことが推測される。期待より満足の方が低かった項目は、「大会の盛り上げ」と「ランナーの支え」の2項目であり、自分自身に関することというより、大会に自分がどれだけ積極的に関わられたかどうかに関係する項目であった。「大会をどうやったら盛り上げることができるのか」「ランナーの支えになるにはどうしたらいいのか」のイメージが充分にできていなかったことが推察されるが、この2項目はボランティア参加者の意欲、大会への関わり方、達成度に関する重要な項目だけに、これらをどうやったら高められるかが今後の課題であろう。

表4 満足の平均値と標準偏差(性別)

	男性(n=446)		女性(n=443)		t value	
	Mean	SD	Mean	SD		
普段では得られない体験ができた	3.41	0.70	3.61	0.56	4.53	***
大会を盛り上げることができた	3.20	0.76	3.27	0.66	1.38	
ランナーの支えになった	3.06	0.75	3.12	0.73	1.19	
新しい知識や経験を得た	3.11	0.82	3.35	0.69	4.62	***
社会的な視野が広がった	3.01	0.80	3.23	0.73	4.30	***
地域社会に貢献できた	3.13	0.75	3.21	0.70	1.66	
いろいろな人と出会えた	3.05	0.83	3.31	0.75	4.70	***
自分自身が成長できた	2.88	0.86	3.15	0.80	4.75	***
ランナーと交流できた	2.89	0.96	3.21	0.88	5.17	***
職場や学校の仲間と参加できた	2.83	1.15	2.95	1.19	1.57	
他のボランティアと交流できた	2.73	0.88	2.89	0.90	2.65	**
自分の知識や経験を活かせた	2.73	0.84	2.69	0.83	0.74	
余暇を有効に過ごせた	2.92	0.90	3.24	0.80	5.51	***
知人と一緒に参加できた	2.76	1.13	3.14	1.04	5.10	***
自分の能力を発揮できた	2.84	0.83	2.85	0.79	0.21	
大会に自分が必要だと感じた	2.66	0.88	2.76	0.83	1.68	

** : p<0.01, *** : p<0.001

1) 満足と性別

性別に満足の平均値と標準偏差を表4に示した。男性が446名、女性が443名であった。

男性で平均値が最も高かったのは、「普段では得られない体験ができた」が3.41、次いで「大会を盛り上げることができた」が3.20、「地域社会に貢献できた」が3.13で高い値を示した。逆に、最も低い値を示したのは、「大会に自分が必要だと感じた」が2.66、「自分の知識や経験を活かせた」が2.73、「他のボランティアと交流できた」が2.73であった。

女性で平均値が最も高かったのは、「普段では得られない体験ができた」が3.61、次いで「新しい知識や経験を得た」が3.35、「いろいろな人と出会えた」が3.31で高い値を示した。逆に、最も低い値を示したのは、「自分の知識や経験を活かせた」が2.69、「大会に自分が必要だと感じた」が2.76、「自分の能力を発揮できた」が2.85であった。

16項目中、女性の方が男性より高かった項目は15項目で、男性の方が女性より高かったのは1項目のみであった。したがって、女性の方が男性より満足度が高かったことが推察される。有意差のみられた項目は9項目で、全て女性の方が男性より満足度が高かった項目であった。有意差のみられた項目は、「普段では得られない体験ができた(p<0.001)」「新しい知識や経験を得た(p<0.001)」「社会的な視野が広がった(p<0.001)」「いろいろな人と出会えた(p<0.001)」「自分自身が成長できた(p<0.001)」「ランナーと交流できた

表5 満足の平均値と標準偏差(年齢区分)

	10-29歳(n=541)		30-59歳(n=185)		60歳以上(n=162)		F value	
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD		
普段では得られない体験ができた	3.59	0.62	3.43	0.66	3.32	0.66	12.12	***
大会を盛り上げることができた	3.27	0.73	3.14	0.72	3.22	0.64	2.34	
ランナーの支えになった	3.20	0.73	2.86	0.73	2.97	0.71	16.92	***
新しい知識や経験を得た	3.36	0.71	3.07	0.79	2.97	0.84	21.33	***
社会的な視野が広がった	3.26	0.71	2.93	0.80	2.87	0.83	23.77	***
地域社会に貢献できた	3.25	0.71	3.03	0.76	3.06	0.71	8.59	***
いろいろな人と出会えた	3.33	0.79	2.98	0.74	2.89	0.77	27.78	***
自分自身が成長できた	3.22	0.75	2.78	0.87	2.55	0.85	53.07	***
ランナーと交流できた	3.34	0.81	2.69	0.94	2.49	0.92	78.49	***
職場や学校の仲間と参加できた	3.48	0.73	1.80	1.13	2.14	1.12	302.51	***
他のボランティアと交流できた	2.94	0.88	2.68	0.91	2.51	0.84	16.72	***
自分の知識や経験を活かせた	2.81	0.82	2.53	0.81	2.59	0.84	9.75	***
余暇を有効に過ごせた	3.11	0.87	3.02	0.90	3.03	0.80	1.18	
知人と一緒に参加できた	3.31	0.83	2.32	1.24	2.46	1.20	88.08	***
自分の能力を発揮できた	2.93	0.82	2.71	0.77	2.73	0.76	7.04	***
大会に自分が必要だと感じた	2.82	0.86	2.51	0.81	2.59	0.85	11.42	***

*** : p<0.001

(p<0.001)」「他のボランティアと交流できた (p<0.01)」「余暇を有効に過ごせた (p<0.001)」「知人と一緒に参加できた (p<0.001)」であった。

「社交」に関連する要素の5項目中、4項目で有意差がみられたことから、女性は男性と比べてランナー、知人、他のボランティアとの交流に満足を感じていることが明らかになった。一方、「達成」に関する要素の4項目中、3項目で有意差がみられなかった。「自分の能力を発揮できた」「大会に自分が必要と感じた」などの達成感、大会への貢献度に関する項目には、性別の差があまりみられないことが明らかになった。

2) 満足と年齢

年齢区分別に満足の平均値と標準偏差を表5に示した。年齢は10-29歳、30-59歳、60歳以上の3グループに区分した。10-29歳は541名、30-59歳は185名、60歳以上は162名であった。

10-29歳の区分で平均値が最も高かったのは、「普段では得られない体験ができた」が3.59、次いで「職場や学校の仲間と参加できた」が3.48、「新しい知識や経験を得た」が3.36で高い値を示した。逆に、最も低い値を示したのは、「自分の知識や経験を活かせた」が2.81、「大会に自分が必要だと感じた」が2.82、「自分の能力を発揮できた」が2.93であ

った。

30-59歳の区分で平均値が最も高かったのは、「普段では得られない体験ができた」が3.43、次いで「大会を盛り上げることができた」が3.14、「新しい知識や経験を得た」が3.07で高い値を示した。逆に、最も低い値を示したのは、「職場や学校の仲間と参加できた」が1.80、「知人と一緒に参加できた」が2.32、「大会に自分が必要だと感じた」が2.51であった。

60歳以上の区分で平均値が最も高かったのは、「普段では得られない体験ができた」が3.32、次いで「大会を盛り上げることができた」が3.22、「地域社会に貢献できた」が3.06で高い値を示した。逆に、最も低い値を示したのは、「職場や学校の仲間と参加できた」が2.14、「知人と一緒に参加できた」が2.46、「ランナーと交流できた」が2.49であった。

16項目全体の平均値は、10-29歳が3.20、30-59歳が2.78、60歳以上が2.77であった。また、全項目で10-29歳の区分が最も高い値を示したことから、若い年齢層での満足度は他の年齢層より高いことが明らかになった。さらに、16項目中14項目で有意差 ($p < 0.001$) がみられたことから、若い年齢層の満足度は高かったことが伺える。有意差がみられなかった2項目は、「大会を盛り上げることができた」と「余暇を有効に過ごせた」で、いずれも「達成」に関連する要素であった。

3) 満足と再参加意図

参加意図別に満足の平均値と標準偏差を表6に示した。再参加意図は「来年も神戸マラソンのボランティアに参加したいですか」の問いに対して、「1. 参加したい」と「2. まあ参加したい」に答えた人を「参加したい」群に分類し、「3. あまり参加したくない」と「4. 参加したくない」と答えた人を「参加したくない」群に分類した。「参加したい」群は759名、「参加したくない」群は123名で、全体の86.0%がまた来年も参加したいという再参加意図をもっていた。

「参加したい」群で平均値が最も高かったのは、「普段では得られない体験ができた」が3.56、次いで「大会を盛り上げることができた」が3.31、「新しい知識や経験を得た」が3.29で高い値を示した。逆に、最も低い値を示したのは、「自分の知識や経験を活かせた」が2.76、「大会に自分が必要だと感じた」が2.78、「他のボランティアと交流できた」が2.86であった。

「参加したくない」群で平均値が最も高かったのは、「普段では得られない体験ができた」が3.14、次いで「新しい知識や経験を得た」が2.83、「いろいろな人と出会えた」が2.81で高い値を示した。逆に、最も低い値を示したのは、「大会に自分が必要だと感じた」が2.30、「自分の知識や経験を活かせた」が2.42、「他のボランティアと交流できた」と「自

表6 満足の平均値と標準偏差(再参加意図)

	参加したい(n=759)		参加したくない(n=123)		t value	
	Mean	SD	Mean	SD		
普段では得られない体験ができた	3.56	0.58	3.14	0.86	6.95	***
大会を盛り上げることができた	3.31	0.64	2.76	0.94	8.15	***
ランナーの支えになった	3.14	0.70	2.76	0.86	5.25	***
新しい知識や経験を得た	3.29	0.74	2.83	0.85	6.25	***
社会的な視野が広がった	3.19	0.74	2.71	0.84	6.45	***
地域社会に貢献できた	3.23	0.67	2.74	0.90	7.17	***
いろいろな人と出会えた	3.24	0.77	2.81	0.92	5.53	***
自分自身が成長できた	3.08	0.82	2.60	0.89	5.95	***
ランナーと交流できた	3.10	0.92	2.75	1.00	3.79	***
職場や学校の仲間と参加できた	2.91	1.19	2.80	1.06	0.94	
他のボランティアと交流できた	2.86	0.89	2.50	0.90	4.15	***
自分の知識や経験を活かせた	2.76	0.82	2.42	0.86	4.26	***
余暇を有効に過ごせた	3.17	0.81	2.53	0.97	7.76	***
知人と一緒に参加できた	2.98	1.10	2.74	1.05	2.23	*
自分の能力を発揮できた	2.90	0.78	2.50	0.91	5.13	***
大会に自分が必要だと感じた	2.78	0.81	2.30	0.96	5.82	***

* : p<0.05, *** : p<0.001

分の能力を発揮できた」が同値で2.50であった。

16項目全体の平均値は、「参加したい」が3.09、「参加したくない」が2.68であった。また、全項目で「参加したい」群が高い値を示し、16項目中15項目で有意差がみられたことから、来年の再参加意図をもっている群は満足度が高いことが明らかになった。そのなかでも、満足度の差が大きかった項目は、「大会を盛り上げることができた (p<0.001, t値=8.15)」と「余暇を有効に過ごせた (p<0.001, t値=7.76)」の「達成」の要素に関する項目であった。特に、「大会を盛り上げることができた」は、性別でも年齢区分でも有意差がみられなかった項目だけに、再参加意図で大きな差がみられたことは非常に興味深い。一度参加した人が次回も継続して参加するという今後のボランティア・マネジメントにおいて、この項目をいかに高い値を示すことができるかが重要なポイントになってくるだろう。

また、期待と満足の比較において、「大会の盛り上げ」と「ランナーの支え」の2項目のみが期待よりも満足の値が有意に低かった。すなわち、この2項目は期待していたほど満足が得られなかったことを示している。しかし、再参加意図で分類した群では、この2項目は有意な差がみられ、「参加したい」群は「参加したくない」群に比べ、高い満足度を感じていた。先述のように、この2項目はボランティア・マネジメントという観点から重要なポイントになってくると思われる。

まとめ

2011年11月20日に開催された「神戸マラソン2011」で活動した登録ボランティア参加者を対象に、アンケート調査を行った。個人ボランティアの回収数は285票で、団体ボランティアの回収数は633票であった。個人ボランティアと団体ボランティアの合計は918票（うち有効回答数は889票）で、全体の回収率は27.2%であった。

調査内容は、「社交」「学習・経験」「個人的興味」「キャリア」「自己陶冶」「組織的義務」「社会的義務」「スポーツ」の8要素10項目、その他に2項目を加え、計12項目を動機として質問した。ボランティアをする前の期待は、「社交」「学習・経験」「自己陶冶」「社会的義務」「達成」の5要素16項目を期待として質問した。ボランティアを終えた満足度は、ボランティアをする前の期待と対応するように作成した。調査対象となったサンプルの特性として、性別、年齢、職業、居住地、過去のボランティア経験、再参加意図として来年の神戸マラソンボランティアへの参加希望を質問した。分析結果は以下のようにまとめられる。

- ①動機は「日常では得られない経験（＝学習・経験）」「職場、学校や団体の活動の一環（＝組織的義務）」の要因が高く、「仕事に役立つ（＝キャリア）」「新しい知識や能力を得る（＝学習・経験）」「自己の再発見や自己成長につながる（＝自己陶冶）」の要因が低かった。
- ②期待の項目の中で平均値が最も高かったのは「普段では得られないことを体験したい」、「大会を盛り上げたい」、「ランナーの支えになりたい」が高い値を示した。逆に、最も低い値を示したのは「大会に自分が必要であると感じている」、「自分の能力を発揮したい」、「身内や友人・知人と一緒に参加したい」であった。
- ③満足の項目の中で平均値が最も高かったのは「普段では得られないことを体験できた」、「大会を盛り上げたい」、「新しい知識や経験を得た」が高い値を示した。逆に、最も低い値を示したのは「自分の知識や経験を活かせた」、「大会に自分が必要であると感じた」、「他のボランティアと交流する機会を得た」であった。
- ④期待よりも満足の値が高かったのは10項目で、期待よりも満足が低かったのは5項目であった（1項目は同値）。有意差がみられた10項目の中で、8項目は期待より満足の値が高く、2項目は期待より満足の値が低かったことから、参加者は概ね期待通り、あるいは期待を上回る満足を得ていたことが推測される。
- ⑤満足について性別で比較した結果、16項目中、女性の方が男性より高かった項目は15項目で、男性の方が女性より高かったのは1項目のみであった。有意差のみられた項目は9項目で、全て女性の方が男性より満足度が高かった項目であったことから、女性の方が男性より満足度が高かったことが推察される。また、「社交」に関連する要

素の5項目中、4項目で有意差がみられたことから、女性は男性と比べてランナー、知人、他のボランティアとの交流に満足を感じていることが明らかになった。

⑥満足について年齢区分別で比較した結果、全項目で10-29歳の区分が最も高い値を示した。16項目全体の平均値は、10-29歳が3.20、30-59歳が2.78、60歳以上が2.77であったこと、さらに、16項目中14項目で有意差がみられたことから、若い年齢層での満足度は他の年齢層より高いことが明らかになった。

⑦満足について参加意図別に比較した結果、全項目で「参加したい」群が高い値を示した。16項目全体の平均値は、「参加したい」群が3.09、「参加したくない」群が2.68であったこと、さらに、16項目中15項目で有意差がみられたことから、来年の再参加意図をもっている群は満足度が高いことが明らかになった。そのなかでも、特に満足度の差が大きかった項目は、「大会を盛り上げることができた」と「余暇を有効に過ごせた」の「達成」の要素に関する項目であった。

期待、満足ともに高い値を示したのが「普段では得られない体験」であり、動機でも「日常では得られない経験ができる」が最も高い値を示したことから、「非日常の経験ができる」は、スポーツ・ボランティアをこれから行おうとする人に広く推進するためにも、効果的なキーワードになり得ると考えられる。

一方で、「大会の盛り上げ」と「ランナーの支え」の2項目について、「参加したい」群は「参加したくない」群より高い満足度を感じていたことから、この2項目に対する満足度を高めることが、今後のボランティア・マネジメントの課題であるといえよう。

参考文献

伊藤忠弘(2011)ボランティア活動の動機の検討, *学習院大学文学部研究年報*, Vol.58, pp35-55

Kim M., Zhang J.J., Connaughton D.P. (2010) Comparison of volunteer motivations in different youth sport organizations, *European Sport Management Quarterly*, Vol.10, No.3, pp343-365

木村和彦(2009)スポーツ・ヘルスツーリズムの対象と事例, *スポーツ・ヘルスツーリズム*, 原田宗彦・木村和彦(編), 大修館書店, pp47-62

神戸マラソン大会公式ホームページa(2012)Retrieved December, 2012, from <http://www.kobe-marathon.net/news/11.html>

神戸マラソン大会公式ホームページb(2012)Retrieved December, 2012, from <http://www.kobe-marathon.net/volunteer/group.html>

坂野純子, 矢嶋裕樹, 中嶋和夫(2004)地域住民におけるボランティア活動への参加動機と満足感の

- 関連性, *東京保健科学学会誌*, Vol.7(1), pp17-24
- 笹川スポーツ財団(2004)わが国のスポーツ・ボランティアの現状, *スポーツ・ボランティア・データブック*, SSF笹川スポーツ財団, pp 4-10
- 笹川スポーツ財団公式ホームページ(2012)Retrieved December. 2012, from
http://www.ssf.or.jp/research/sldata/data_population_01.html
- 東京マラソン大会公式ホームページa(2012)Retrieved December. 2012, from
<http://www.tokyo42195.org/2013/history>
- 東京マラソン大会公式ホームページb(2012)Retrieved December. 2012, from
<http://www.tokyo42195.org/2013/info/news/621>
- 東京マラソン大会公式ホームページc(2012)Retrieved December. 2012, from
<http://www.tokyo42195.org/2012/volunteer/index.html>
- 松岡宏高, 小笠原悦子(2002) 非営利スポーツ組織を支えるボランティアの動機, *体育の科学*, Vol.52(4), pp277-284
- 山口泰雄(2004)スポーツ・ボランティアの可能性, *スポーツ・ボランティアへの招待*, 山口泰雄(編), 世界思想社, pp 1-14